教職開発研究　第５号　2022　43－51

小学校道徳科の生命尊重教育における教材に関する一考察

― 死に関する内容を扱った教材に注目して ―

毛　　月

A Study of Teaching Materials on Respect for Life in Elementary School Moral Education
― Focusing on content related to death ―

Yue MAO

Abstract: The purpose of this paper is to classify the contents of the teaching materials dealing with death in current elementary school moral education textbooks, and to clarify the specific characteristics of such teaching materials for each lower, middle, and upper grades. In this paper, the contents of the teaching materials are classified according to three areas created with reference to research by Ogura et al. (1990). Analysis shows that the materials dealing with contents related to death can be divided into three types: materials dealing with the death of plants, the death of animals, and the death of humans. In addition, the areas and contents of the teaching materials to be covered in each grade are distinctive in their characteristics. However, the relationship between the arrangement of these teaching materials and the development of children's perception of death was not examined in this study. In the future, I would like to clarify how children's perception of death changes across the grades of elementary school.

Key words: moral education, education on respect for life, death education,
research of teaching materials
キーワード：道徳教育，生命尊重教育，死の教育，教材研究

１．問題の所在と研究の目的

日本においては，生命を尊重する心を養うことは，教育の目標の１つとされている。教育基本法第２条（2006）では，「生命を尊び，自然を大切にし，環境の保全に寄与する態度を養うこと」が教育の目標の１つであり，また，学校教育法第21条（2019）においては，義務教育の目標の１つとして，「生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」が示されている。「特別の教科　道徳」（以下，道徳科）においては，「Ｄ　主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること」の内容項目の中で生命尊重教育が取り上げられている。

生命尊重教育においては，生きているすばらしさに関する内容だけではなく，死に関する内容も取り上げられている。小倉ら（1989）は，核家族化・小家族化の進行に伴って子どもたちの死の直接経験の減少と，マスメディアによる歪んだ死の間接経験の増加，及び医療技術の進歩と葬儀産業の発達による死の非日常化を指摘し，学校での死の教育の必要性を指摘した。赤澤（2005）は，子どもによるいじめや犯罪といった問題行動への対処法の一つとして死の教育の必要性を指摘した。実際，小学校学習指導要領解説総則編（文部科学省，2017）においても，生と死の両面から生命尊重教育を行うことの必要性が示されている。このように，小学校段階でも，生きていることに関する内容だけでは不十分であり，死に関する内容を教えることも重視すべきであることが指摘されている。死に関する内容を教えるためには，死に関する内容を扱った教材内容について検討しておくことが必要である。

生命尊重教育を取り上げた先行研究は多くあるが，道徳科が設置され教科書が発行されてから間もないこともあり，教材分類を行った研究はあまり見られない。その中で自然愛護に関する教材分類を行った瀬戸山の研究は注目に値する（瀬戸山，2021）。しかし，死に関する内容を扱った教材分類に関する研究はほとんど

行われていない。わずかに小倉ら（1990）の研究が見られるが，これは道徳科が設置される以前のもので，道徳科が設置されてからの研究は管見の限り見られない。そこで本論では，小倉ら（1990）を参考にして，死に関する内容を扱った教材の分類を行い，死について知ることで生の大切さや喜びを，より深く感じ考えることのできる道徳教育の開発に資することとする。本論では，特に死に関する内容を扱った教材を対象として教材分類を行うことにする。

本論では，まず，現行の小学校道徳教科書にある死に関する内容を扱った教材の内容分類を行う。それに基づいて，死に関する内容を扱った教材内容の特徴を低・中・高学年ごとに明らかにする。

2．道徳教科書における死に関する内容を扱った教材

本論では，文部科学省が作成した小学校用教科書目録（令和３年度使用）にある令和２年版の学校図書，教育出版，学研，光文書院，廣済堂あかつき，日本文教出版，光村図書，東京書籍の１～６年の教科書を分類の対象とした。対象とした教材は，上述した８社の小学校道徳教科書48冊における「Ｄ　主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること」に関する教材（以下，Ｄに関する教材とする）の中で，死に関する内容を扱った教材である。また，各教材が死に関する内容を扱った教材に該当するかどうかを判断するにあたっては，教材の内容，各教科書出版社が作成した内容解説資料，及び文部科学省が公開した教科書編集趣意書を参考にし，以下の２つの条件を同時に満たす場合は死に関する内容を扱った教材とした。１．Ｄに関する教材である。２．植物，動物，人間の死に関する内容を扱っている教材である。

（1）植物，動物，人間の死に関する内容を扱っている教材数

今回調査した８社48冊の道徳教科書には，死に関する内容を扱った教材が，全319本中62本あった。学年ごとにみると，表１のように，低学年では，全99本中８本であった。１年生では全部で１本であり，２年生では全部で７本であった。また，日本文教，光文書院，教育出版，光村図書という４社の教科書では，死に関する内容を扱った教材は見つけられなかった。１年生の教科書では死に関する内容を扱った教材を載せているのは，廣済堂あかつき１社であった。中学年では，死に関する内容を扱った教材が全97本中23本であった。３年生では11本であり，４年生では12本であった。教育出版社の教科書が一番多く，６本であった。日本文教の教科書が一番少なく，１本であった。高学年では，死に関する内容を扱った教材が全123本中31本であった。５年生では全部で12本であり，６年生では全部で19本であった。廣済堂あかつきと日本文教の教科書が一番多く，５本であった。学校図書の教科書が一番少なく，２本であった。

以上から，死に関する内容を扱った教材が道徳教科書の教材に占める割合は，低学年より中・高学年の方が多いということが分かった。学年ごとにみると，低学年段階では死に関する内容を扱った教材はほとんどない。中学年段階では，死に関する内容を扱った教材が多くなっている。高学年段階では，死に関する内容を扱った教材が低学年，中学年よりも多い。教科書会社によって違いはあるが，大体このような傾向があると考えられる。

表１　Ｄに関する教材にある植物，動物，人間の死に関する内容を扱っている教材数（本）

学年／出版社	低学年			中学年			高学年		
	１年生	２年生	合計	３年生	４年生	合計	５年生	６年生	合計
廣済堂あかつき	1(5)	2(5)	3(10)	2(5)	1(5)	3(10)	2(6)	3(6)	5(12)
日本文教	0(5)	0(6)	0(11)	0(6)	1(6)	1(12)	2(7)	3(8)	5(15)
東京書籍	0(6)	2(8)	2(14)	1(7)	1(7)	2(14)	2(8)	2(8)	4(16)
光文書院	0(8)	0(7)	0(15)	1(8)	1(9)	2(17)	0(11)	4(14)	4(25)
教育出版	0(7)	0(8)	0(15)	2(4)	4(6)	6(10)	2(8)	1(6)	3(14)
光村図書	0(5)	0(5)	0(10)	1(5)	2(5)	3(10)	2(6)	2(7)	4(13)
学校図書	0(6)	1(6)	1(12)	2(6)	1(6)	3(12)	1(6)	1(6)	2(12)
学研	0(6)	2(6)	2(12)	2(6)	1(6)	3(12)	1(8)	3(8)	4(16)
合計	1(48)	7(51)	8(99)	11(47)	12(50)	23(97)	12(60)	19(63)	31(123)

※（　）内はＤに関する教材全体の本数。

（2）植物，動物，人間の死に関する内容を扱っている教材名

次に，死に関する内容を扱った教材において，死亡する対象を植物，動物，人間に分類して整理した。植物の場合は，枯れることを死として捉えることとした。今回は出版社ごとではなく，教材内容に着目して分類を行った。また，他社と重複している教材があるため，同じ教材名でも出版社が異なる場合は，それぞれ１本として数えた。番号は便宜的につけた。

表２にあるように，低学年では，植物の死を扱っている教材は２本，動物の死を扱っている教材は６本，人間の死を扱っている教材は１本であった。１年生の教材では，植物の死のみであった。２年生では，植物の死を扱っている教材は１本，動物の死を扱っている

表２　Ｄに関する教材にある植物，動物，人間の死に関する内容を扱っている教材名

教材種類／学年	植物の死亡が扱われる教材	動物の死亡が扱われる教材	人間の死亡が扱われる教材
１年生	1.「まりちゃんとあさがお」		
２年生	2.「ぴよちゃんとひまわり」	3.「おはかまいり」 4.「キリンのみなみ」 5.「ごめんね，みなみ」 6.「ゆきひょうのライナ」 7.「からすの子」 8.「いのちはいくつもあるのかな」※	8.「いのちはいくつもあるのかな」※
３年生	9.「森のいのち」※	9.「森のいのち」※ 10.「ベランダのツバメ」 11.「大切なものは何ですか」 12.「すず虫」	13.「目の見えない犬（つなげよう　支えられている命）」 14.「電池が切れるまで」 15.「おじいちゃん，おばあちゃん，見ていてね」 16.「命どうたから」 17.「光祐くんのアサガオ」 18.「さいたよ，光祐君のアサガオ」 19.「六さいのおよめさん」
４年生		20.「かわいそうなぞう」 21.「動物たちの命を守る」 22.「タイガとココア」 23.「生き物と機械」※ 24.「ウミガメの命」	23.「生き物と機械」※ 25.「お母さん泣かないで」 26.「走れ江ノ電 光の中へ」 27.「おばあちゃんとの思いで」 28.「命」 29.「電池が切れるまで」 30.「せいいっぱい生きる」） 31.「おじいちゃんのごくらくごくらく」
５年生		32.「クマのあたりまえ」 33.「オオカミから教えられたこと」	34.「その思いを受けついで」 35.「明日もまた生きていこう」 36.「命」 37.「命の詩―電池が切れるまで」 38.「電池が切れるまで」） 39.「母さんの歌」 40.「おばあちゃんが残したもの」 41.「希」 42.「最後のコンサート――チェロ奏者・徳永兼一郎」 43.「たったひとつのたからもの」
６年生		44.「七十八円の命」 45.「メジロ」 46.「創志くんと子牛」 47.「命の重さはみな同じ」 48.「命と向き合う人生」 49.「命の旅」	50.「星への手紙」 51.「命のアサガオ」 52.「その思いを受けついで」 53.「その思いを受けついで」 54.「その思いを受け継いで」 55.「その思いを受けついで」 56.「お母さんへの手紙」 57.「生命のメッセージ」 58.「負けないで」 59.「羽ばたけ，折り鶴」 60.「折り鶴にこめられた願い」 61.「おじいちゃんとの約束」 62.「命を見つめて」

※１つの教材において複数の対象を含んでいるもの。

教材は６本，人間の死を扱っている教材は１本であった。「おはかまいり」のように，動物の死に関する話題から人間の死へ繋がっていく教材，「いのちはいくつもあるのかな」のように，動物と人間両方とも扱っている教材もあった。中学年では，植物の死を扱っている教材は１本，動物の死を扱っている教材は９本，人間の死を扱っている教材は15本であった。３年生では，植物の死を扱っている教材は１本，動物の死を扱っている教材は４本であり，人間の死を扱っている教材は７本であった。４年生では，動物の死を扱っている教材は５本，人間の死を扱っている教材は８本であった。植物の死を扱っている教材はなかった。高学年では，動物の死を扱っている教材は８本，人間の死を扱っている教材は23本であった。植物の死を扱っている教材はなかった。５年生では，動物の死を扱っている教材は２本，人間の死を扱っている教材は10本であった。６年生では，動物の死を扱っている教材は６本，人間の死を扱っている教材は13本であった。

以上から人間，動物，植物の死が扱われている教材数は，低･中･高学年ごとに異なることが明らかになった。低学年段階では，動物と植物の死を扱う教材が多く，人間の死を扱う教材が少なかった。中学年段階では，植物を取り上げる教材が少なかった。人間の死と動物の死の両方を扱っているが，人間の死を扱う内容の方が多かった。高学年段階では，植物を扱っている教材はなかった。動物の死を扱う教材が少なく，人間の死を扱う教材が多かった。

３．教材分類

（1）分類の視点

小倉ら（1990）は，アメリカの児童生徒用の教科書（教師用手引書もついている），大学での講義要項，看護教育における Death Education 計画など８つのカリキュラム資料においてほぼ共通な教育内容を選定・類型化し，日本の小学校段階における死の教育内容の試案を作成した。小倉ら（1990）は，小学校段階における死の教育内容を，医学・生物学的領域，心理学的領域，社会・文化的領域の３領域で分類した。医学・生物学的領域に属する内容項目は，加齢，死の過程（生物的）と死の判定，死の原因，臓器移植であり，心理学的領域に属する内容項目は，死にゆく人々の心理的過程，悲嘆のプロセス，告知であり，社会・文化的領域に属する内容は，葬儀・埋葬であった。

本論では，小倉ら（1990）が作成した死の教育内容の試案を参考にして，表２に示した各教材を学年ごとに領域分類を行っていく。ここでは，教材内容の中に，これらの領域に当てはまる内容が含まれているかどうかで判断した。複数の内容が含まれている場合は複数の領域とした。なお，表２に示した教材は必ずしも小倉ら（1990）の小学校段階の教育内容試案にある３領域に対応しているとは限らないと考えられるため，一部修正した。修正点は以下の通りである。

第１に，仲村（1994）の子どもの死の概念に関する研究を参考にして，医学・生物学的領域を，死の普遍性，死の無機能性，死の非可逆性と死の原因とした。第２に，今回分類対象とした道徳教科書には，動物の安楽死・殺処分などに関する教材が見られたので，安楽死・殺処分など動物の死への関与を社会・文化的領域に入れた。第３に，臓器移植という内容は，今回分類対象とした教科書では見つけられなかったため削除した。第４に，心理学的領域について，今回分類対象とした道徳教科書では，告知という内容が見つけられなかったため削除した。

以上を踏まえ，今回採用した領域分類と分類項目は，以下の通りである。ここでは表中の記号と番号を示す。Ⅰ医学・生物学的領域は，（1）死の無機能性，（2）死の非可逆性，（3）死の普遍性，（4）死の原因である。Ⅱ心理学的領域は，（1）死にゆく心理段階，（2）悲嘆のプロセスである。Ⅲ社会･文化的領域は，（1）葬儀･埋葬，（2）安楽死･殺処分など動物の死への関与，（3）戦争である。

各領域の分類項目を詳しく説明する。本論においては，それぞれの分類項目を以下のように捉えることにした。Ⅰ医学･生物学的領域での死の無機能性は，「肉体機能，新陳代謝，感情，動作，思考といった，生きている時に行っていることすべてが死によって終わるということ」を示す（赤澤，2001）。死の非可逆性は，「生きているものが一度死ぬと，その肉体は二度と生き返ることはできない」ことを示す（赤澤，2001）。死の普遍性は，「自分も含めて生きているものは全て，いつかは必ず死ぬということ」を示す（赤澤，2001）。死の原因は，死の現実的原因（病気，けが，加齢，事故，災害等）を示す。Ⅱ心理学的領域での死にゆく心理段階は，否認，怒り，取り引き，抑鬱，受容の５段階である（キューブラー・ロス，1971）。死にゆく心理段階の内容項目では，死にゆく人への支援も含まれている。悲嘆のプロセスは，１．精神的打撃と麻痺，２．否認，３．パニック，４．怒りと不当感，５．敵意と恨み，６．罪の意識，７．空想形成，幻想，８．孤独感と抑鬱，９．精神的混乱と無関心，10．あきらめ（受容），11．新しい希望，12．立ち直りという12段階である（デーケン，2001）。悲嘆のプロセスの内容項目では，悲嘆の過程にある人々への支援も含

まれている。なお，死にゆく心理段階と悲嘆のプロセスは，教材の中で必ずしも全段階が出されるとは限らない。Ⅲ社会・文化的領域での葬儀・埋葬は，葬儀そのもの，及び葬儀の心理面での役割である（小倉ら，1990）。安楽死・殺処分など動物の死への関与は，安楽死・殺処分など人間が動物の死に関与すること及びそれについての議論である。戦争は，戦争が大量の死傷者をもたらすことである（小倉ら，1990）。

（2）分類の結果

次に，表２に示した教材の領域を，低・中・高学年のまとまりごと及び学年ごとに検討していく。図１，図２，図３に示されている教材の番号は，表２に示されている教材の番号に一致している。教材を例として挙げる時には，その番号で示す。教材が複数の領域に関連している場合は，複数で数えている。

低学年では，１年生の教材は，医学・生物学的領域での死の無機能性に関する教材のみであった（１）。２年生では，医学・生物学的領域に関する教材は15本であった。詳しく見ると，死の無機能性に関する教材は４本であり（２，４，５，８），死の非可逆性に関する教材は５本であり（２，４，５，７，８），死の普遍性に関する教材は２本であった（６，８）。死の無機能性を，命のつながりと一緒に教えるような教材は２本であった（１，２）。死の原因に関する教材は４本で，けがを取り上げた教材は２本（４，５），栄養不足を取り上げた教材は１本（７），加齢を取り上げた教材は１本（８）であった。心理学的領域に関する教材は３本であった。それらは，悲嘆のプロセスに関する教材であり，動物や植物の死を通して死の悲しみを教えようとするものであった（２，４，７）。社会・文化的領域に関する教材は，葬儀・埋葬に関する１本であった（３）。

中学年では，医学・生物学的領域に関する教材は28本であった。死の無機能性と死の非可逆性に関する教材数は低学年とほとんど同じであった。死の無機能性に関する教材は３本であり（９，11，12），動物の死を扱った教材であった。死の非可逆性に関する教材は７本であり（13，14，19，23，28，29，30），動物の死を扱った教材であった。また，動物の死と人間の死の両方を扱った教材は１本であった（23）。死の普遍性と死の原因に関する教材は低学年に比べて多かった。死の普遍性に関する教材は５本であり，そのうち植物と動物の死の両方を扱った教材は１本であり（９），人間の死を扱った教材は４本であった（14，28，29，30）。死の原因に関する教材は13本であり，病気を取り上げた教材は11本（14，17，18，19，23，25，26，28，29，30，31），けがを取り上げた教材は２本（15，23），動物が食べ物として食べられることを取り上げた教材は１本であった（24）。これは命のつながりを教える内容を含んでいる教材であった。心理学的領域に関する教材は19本であり，低学年と比べて多かった。死にゆく心理段階に関する教材について，３年生は１本であり（14），４年生は４本であった（26，28，29，30）。死にゆく心理段階に対する記述は，主に取り引きと受容に関することであった。また，死にゆく人を援助する必要性を取り上げた教材は１本であった（26）。悲嘆のプロセスに関する教材は14本であった。そのうち動物の死を扱った教材は５本であり（10，11，12，20，22），人間の死を扱った教材は９本であった（15，17，18，19，25，26，27，30，31）。死の悲しみ，孤独，打撃等のプロセスを経て，最後に立ち直っていくことを取り上げた教材は２本であった（17，18）。社会･文化的領域に関する教材は３本であった。安楽死・殺処分など動物の死への関与に関する教材は１本であり（21），戦争に関する教材は２本であった（16，20）。

高学年では，医学・生物学的領域に関する教材について，死の無機能性に関する教材は２本であり（32，45），動物の死を扱った教材であった。死の非可逆性に関する教材は５本であり（32，36，37，38，45），動物の死を扱った教材は２本であり（32，45），人間の死を扱った教材は３本であった（36，37，38）。死の普遍性に関する教材について，動物の死を扱った教材は１本であり（32），人間の死を扱った教材は８本であった（34，36，37，38，52，53，54，55）。死の原因に関する教材は22本であり，病気を取り上げた教材　は17本（34，35，36，37，38，40，41，42，43，50，51，52，53，54，55，61，62），交通事故を取り上げた教材は１本（57），栄養不足を取り上げた教材は１本（45），動物が食べ物として食べられることを取り上げた教材は１本（49），戦争によってもたらされた病気を取り上げた教材は２本（60，61）であった。心理学的領域について，死にゆく心理段階に関する教材は12本であり（35，36，37，38，40，42，43，50，56，60，61，62），中学年と比べて多かった。これらの教材は人間の死を扱った教材であった。悲嘆のプロセスについて，５年生は４本であり（34，40，41，43），６年生は11本であった（45，50，51，52，53，54，55，56，57，58，61）。そのうち，動物の死を扱った教材は１本であり（45），人間の死を扱った教材は14本であった（34，40，41，43，50，51，52，53，54，55，56，57，58，61）。死の悲しみ，孤独，打撃等のプロセスを経て，最後に立ち直っていくことを取り上げた教材は２本であった（51，57）。社会・文化

学年	教材名
1年生	1.「まりちゃんと あさがお」(植物)
2年生	2.「ぴよちゃんとひまわり」(植物)
	3.「おはかまいり」(動物)
	4.「キリンのみなみ」(動物)
	5.「ごめんね，みなみ」(動物)
	6.「ゆきひょうのライナ」(動物)
	7.「からすの子」(動物)
	8.「いのちはいくつもあるのかな」(動物・人間)

各学年の課数 / 領域	1 年生の課数	2 年生の課数
Ⅰ医学・生物学的領域	**1**	**15**
⑴死の無機能性	1	4
⑵死の非可逆性	0	5
⑶死の普遍性	0	2
⑷死の原因	0	4
Ⅱ心理学的領域	**0**	**3**
⑴死にゆく心理段階	0	0
⑵悲嘆のプロセス	0	3
Ⅲ社会・文化的領域	**0**	**1**
⑴葬儀・埋葬	0	1
⑵安楽死・殺処分など動物の死への関与	0	0
⑶戦争	0	0

※1 年生は点線で、2 年生は実線で示されている。

図１　低学年段階の教材の領域分類（筆者作成）

学年	教材名
3年生	9.「森のいのち」(植物、動物)
	10.「ベランダのツバメ」
	11.「大切なものは何ですか」(動物)
	12.「すず虫」(動物)
	13.「目の見えない犬 (つなげよう　支えられている命)」(人間)
	14.「電池が切れるまで」(人間)
	15.「おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてね」(人間)
	16.「命どぅたから」(人間)
	17.「光祐くんのアサガオ」(人間)
	18.「さいたよ、光祐君のアサガオ」(人間)
	19.「六さいのおよめさん」(人間)
4年生	20.「かわいそうなぞう」(動物)
	21.「動物たちの命を守る」(補充教材)(動物)
	22.「タイガとココア」(動物)
	23.「生き物と機械」(人間・動物)
	24.「ウミガメの命」(動物)
	25.「お母さん泣かないで」(人間)
	26.「走れ江ノ電　光の中へ」(人間)
	27.「おばあちゃんとの思いで」(人間)
	28.「命」(人間)
	29.「電池が切れるまで」(人間)
	30.「せいいっぱい生きる」(人間)
	31.「おじいちゃんのごくらくごくらく」(人間)

各学年の課数 / 領域	3 年生の課数	4 年生の課数
Ⅰ医学・生物学的領域	**13**	**15**
⑴死の無機能性	3	0
⑵死の非可逆性	3	4
⑶死の普遍性	2	3
⑷死の原因	5	8
Ⅱ心理学的領域	**8**	**11**
⑴死にゆく心理段階	1	4
⑵悲嘆のプロセス	7	7
Ⅲ社会・文化的領域	**1**	**2**
⑴葬儀・埋葬	0	0
⑵安楽死・殺処分など動物の死への関与	0	1
⑶戦争	1	1

※3 年生は点線で、4 年生は実線で示されている。

図２　中学年段階の教材の領域分類（筆者作成）

学年	教材名
5年生	32.「クマのあたりまえ」(動物)
	33.「オオカミから教えられたこと」(動物)
	34.「その思いを受けついで」(人間)
	35.「明日もまた生きていこう」(人間)
	36.「命」(人間)
	37.「命の詩―電池が切れるまで」(人間)
	38.「電池が切れるまで」)(人間)
	39.「母さんの歌」(人間)
	40.「おばあちゃんが残したもの」(人間)
	41.「希」(人間)
	42.「最後のコンサート――チェロ奏者・徳永兼一郎」(人間)
	43.「たったひとつのたからもの」(人間)
6年生	44.「七十八円の命」(動物)
	45.「メジロ」(動物)
	46.「創志くんと子牛」(動物)
	47.「命の重さはみな同じ」(動物)
	48.「命と向き合う人生」(動物)
	49.「命の旅」(動物)
	50.「星への手紙」(人間)
	51.「命のアサガオ」(人間)
	52.「その思いを受けついで」(人間)
	53.「その思いを受けついで」(人間)
	54.「その思いを受け継いで」(人間)
	55.「その思いを受けついで」(人間)
	56.「お母さんへの手紙」(人間)
	57.「生命のメッセージ」(人間)
	58.「負けないで」(人間)
	59.「羽ばたけ、折り鶴」(人間)
	60.「折り鶴にこめられた願い」(人間)
	61.「おじいちゃんとの約束」(人間)
	62.「命を見つめて」(人間)

各学年の課数 / 領域	5 年生の課数	6 年生の課数
Ⅰ医学・生物学的領域	**19**	**19**
⑴死の無機能性	1	1
⑵死の非可逆性	4	1
⑶死の普遍性	5	4
⑷死の原因	9	13
Ⅱ心理学的領域	**11**	**16**
⑴死にゆく心理段階	7	5
⑵悲嘆のプロセス	4	11
Ⅲ社会・文化的領域	**2**	**6**
⑴葬儀・埋葬	0	0
⑵安楽死・殺処分など動物の死への関与	1	4
⑶戦争	1	2

※5 年生は点線で、6 年生は実線で示されている。

図３　高学年段階の教材の領域分類（筆者作成）

的領域に関する教材は８本であり（33，39，44，46，47，48，59，60），中学年より多かった。５年生は２本であり（33，39），６年生は６本であった（44，46，47，48，59，60）。５年生では，安楽死・殺処分など動物の死への関与を取り上げた教材は１本であり(33)，人間と動物の共生を取り上げた教材であった。戦争を取り上げた教材は１本であった（39）。６年生では，安楽死・殺処分など動物の死への関与を取り上げた教材は４本であり（44，46，47，48），そのうち人間と動物の共生を取り上げた教材は１本であった（46）。戦争を取り上げた教材は２本であった（59，60）。

４．総合考察

現行の小学校道徳教科書にある死に関する内容を扱った教材の内容を領域分類した結果について考察する。

（1）各領域における教材数から見た道徳教科書における死の取り扱い

道徳教科書において死の内容がどのように取り扱われているかについて，学年段階ごと，領域ごとに整理する。

低学年では，医学・生物学的領域，心理学的領域，社会・文化的領域のうち，医学・生物学的領域の教材が多かった。分類項目別にみると，死の無機能性，死の非可逆性，死の原因に関する教材が多かった。

中学年では，医学・生物学的領域，心理学的領域，社会・文化的領域のうち，全体では医学・生物学的領域の教材が多かったが，心理学的領域の教材は低学年よりも多かった。分類項目別にみると，死の非可逆性，死の普遍性，死の原因に関する教材数が比較的多かった。悲嘆のプロセスに関する教材，死にゆく心理段階に関する教材も多かった。数は少ないが，安楽死・殺処分等動物の死への関与，戦争に関する教材があった。

高学年では，医学・生物学的領域，心理学的領域，社会・文化的領域のうち，全体では医学・生物学的領域が多いが，心理学的領域も同じぐらい多かった。社会・文化的領域は，低学年，中学年よりも多かった。分類項目別にみると，死の普遍性，死の原因に関する教材が比較的多かった。死にゆく心理段階に関する教材，悲嘆のプロセスに関する教材がほぼ同じであった。低学年，中学年と比べると，死にゆく心理段階に関する教材が多かった。中学年と比べると，安楽死・殺処分等動物の死への関与を取り上げた教材が多かった。

以上をまとめると，低学年では，死に関する内容として，医学・生物学的領域にあたる死の無機能性，死の非可逆性，死の原因に関する教材が取り上げられている。中学年では，全体では医学・生物学的領域の教材が多かったが，心理学的領域の教材が低学年よりも多くなっている。医学・生物学的領域の中でも死の無機能性ではなく，死の非可逆性，死の普遍性，死の原因に関する教材が取り上げられている。心理学的領域では，悲嘆のプロセスに関する教材，死にゆく心理段階に関する教材が取り上げられている。心理学的領域が含まれているのが，中学年の特徴ともいえる。社会・文化的領域にあたる安楽死・殺処分等動物の死への関与，戦争に関する教材が取り上げられているが，数は少ない。高学年では，医学・生理学的領域にあたる死の普遍性，死の原因に関する教材が比較的多かった。心理学的領域にあたる死にゆく心理段階に関する教材，悲嘆のプロセスに関する教材も同じぐらい多かった。高学年に特徴的なのは，社会・文化的領域にあたる教材が他の学年段階よりも多いことで，安楽死・殺処分等動物の死への関与，戦争に関する教材が取り上げられていた。

次に，具体的な教材内容を整理する。

（2）各領域において植物，動物，人間の死が扱われている状況

前述したように，低学年では，医学・生物学的領域にあたる死の無機能性，死の非可逆性，死の原因に関する教材が主として取り上げられている。具体的には，死の無機能性については，１年生では，植物の枯れること等を通じて死の無機能性を教えるような内容になっている。２年生では，動物の死を通して死の無機能性を教えるような内容になっている。多くの場合，死の無機能性を命のつながりと一緒に教えるような内容になっている。死の非可逆性については，２年生では，動物や植物の死を通して，一度死んだら生き返らないことを教える内容になっている。人間はマンガの主人公とは異なって，一回死んだらもう蘇ることができないことを考えさせる内容もある。死の非可逆性についても，命のつながりと一緒に教える内容になっているものがある。死の普遍性については，２年生では，物語や，マンガを使って，生き物は必ず死ぬことを教える内容になっているが，数は少ない。死の原因については，動物や植物の死を通して，けが，加齢，栄養不足等，具体的な生活場面で考えるような内容になっている。心理学的領域にあたる内容や社会・文化的領域にあたる教材はほとんどなかった。

中学年では，医学・生物学的領域にあたる死の非可逆性については，人間の死を通して，一度死んだら生き返らないことを教えるような内容になっている。死の普遍性については，人間，動物，植物の死を通して，すべての生き物は必ず死ぬことを教えるような内容になっている。死の普遍性を教えるときには，命のつながりを一緒に教えるような内容になっている。死の原因については，人間は病気，災害や事故により死ぬことがあることを示すような内容，及び動物の食物連鎖に関わるような内容になっている。心理学的領域にあたる死にゆく心理段階については，主に人間の死を通して，死にゆく人の悲しみと生きていたい気持ちを理解させること，及び死にゆく人を援助することの必要性を教えるような内容になっている。悲嘆のプロセスについては，動物や人間の死を通して死の悲しみを教えるような内容になっている。大事な人が死んだ後，人は死の悲しみ，孤独，打撃等のプロセスを経て，最後に立ち直っていくことを教えるような内容もあった。社会・文化的領域にあたる安楽死・殺処分等動物の死への関与については，４年生では，動物の殺処分・安楽死等を通して，動物の命を大切にすることに関する内容の教材が取り上げられている。戦争については，４年生では，人間や動物の死を通して，戦争は大量の死傷者をもたらすことを教えるような内容になっている。

高学年では，医学・生物学的領域にあたる死の非可逆性については，人間の死を通して，一度死んだら生き返らないことを教えるような内容になっている。死の普遍性については，主に人間の死を通して，人間はいつか必ず死ぬことを教えるような内容になっている。死の原因については，人間は，病気やけが（戦争で起こした病気やけがも含まれる）等で死ぬことがあること，及び動物は，人間や他の動物に食べられることがあるが，命はこのようにつながって支え合うことを教えるような内容になっている。心理学的領域にあたる死にゆく心理段階については，主に人間の死を通して，死にゆく人の悲しみと生きていたい気持ちを理解させること，及び死にゆく人を援助することの必要

性を教えるような内容になっている。悲嘆のプロセスについては，動物や人間の死を通して死の悲しみを教えるのみならず，死の悲しみ，孤独，打撃等のプロセスを経て，最後に立ち直っていくことも教える内容になっている。内容は，大体中学年と同じだが，高学年から，悲嘆のプロセスを教える時は，主に人間の死を扱う内容になっている。社会・文化的領域にあたる安楽死・殺処分等動物の死への関与については，６年生では，動物の殺処分・安楽死等を通して，動物の命を大切にすること及び人間と動物の共生に関する内容が多い。戦争については，人間の死を通して，生きていた一人ひとりは戦争によって自分の命，家族や友だちを失うという戦争の残酷さを教えるような内容になっている。

以上をまとめると，医学・生物学的領域にあたる教材内容は，主として低学年では植物，動物の死を対象としており，中学年，高学年と年齢が上がるにしたがって人間の死が取り上げられるようになっていることが示された。中学年では死の普遍性を教えるときに，命のつながりに気づかせようとする内容になっていることが示された。また，４年生の教材に食物連鎖に関わる内容があり，生き物の命のつながりについて考えさせようとしていると思われる。高学年では，命がつながって支えあうことに気づかせようとする内容があり，命についての考え方を深めようとしていると思われる。

心理学的領域にあたる教材内容は，中学年から取り上げられており，死にゆく人の悲しみの理解，周りの人々の援助などが取り上げられている。悲嘆のプロセスも取り上げられており，ほとんど大人と変わらない内容になっていると思われる。

社会・文化的領域にあたる教材は，４年生から取り上げられているが，４年生では動物や人間の命の大切さを知るという内容になっている。高学年では，人間と動物の命の大切さを知ることにとどまらず，人間と動物が共生できる社会，及び平和な社会について考えさせる内容もあり，命についての視野を広げようとしていると思われる。

５．結論

本論では，現行の道徳教科書のＤに関する教材における死に関する内容を扱った教材の内容分類を小倉ら（1990）を参考にして作成した３領域によって行い，死に関する内容を扱った教材内容の特徴を，低・中・高学年ごとに検討した。その結果，以下の２点が明らかになった。

第１点は，死に関する内容を扱った教材は死亡する対象により，植物の死，動物の死，人間の死を扱った教材に分けられることである。学年が上がるにつれ，教材において植物と動物の死を扱う内容から人間の死を扱う内容になる傾向がある。

第２点は，学年段階ごとに取り上げる領域や教材内容に特徴があることである。低学年では，主として医学・生物学的領域に関する教材が取り上げられ，内容としては植物と動物の死が取り上げられていることが特徴となっている。中学年では心理学的領域に関する教材が含まれていることが特徴となっている。内容としては，動物と人間の死が取り上げられている。高学年では，社会・文化的領域にあたる教材が他の学年段階よりも多く，命についての視野が広がるような内容が取り上げられていることが特徴となっている。内容としては，動物と人間の死が取り上げられている。

これらの教材配置と，子どもの死の認識の発達過程との関連については，今回検討することができなかった。今後は，子どもの死に対する認識が学年段階でどのように変容するかを明らかにすることを課題としたい。

引用文献

赤澤正人（2001）「子どもの死の概念について」『臨床死生学年報』第６号　130-137頁

赤澤正人（2005）「学校現場での生と死の教育の展開」『死の臨床』第28巻第１号 35-36頁

小倉学・中村邦子（1989）「死の教育の目標と内容について－１－死の教育の必要性と目標について」『学校保健研究』第31巻第11号　531-540頁

小倉学・相馬水香（1990）「死の教育の目標と内容について－２－小学校段階の教育内容について」『学校保健研究』第32巻第３号　150-157頁

キューブラー・ロス，Ｅ / 川口正吉訳（1971）『死ぬ瞬間』読売新聞社

瀬戸山千穂（2021）「小中学校における自然愛護の系統性の分析と道徳の授業づくり」『日本道徳教育学会第98回大会プログラム・発表要旨集』52-53頁

デーケン・アルフォンス（2001）『生と死の教育』岩波書店

仲村照子（1994）「子どもの死の概念」『発達心理学研究』第５巻第１号　61-71頁

文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説総則編（https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_001.pdf）（2021年10月12日取得）